

薬学を基盤にした基礎と臨床の融合研究

ー基礎を融合させた臨床研究が患者を救う！

オーガナイザー

大井一弥（鈴鹿医療大薬）
加藤隆児（大阪医薬大薬）

臨床現場において解決すべき問題点は数多く提示されるが、臨床研究にまで至る事例は少なく、研究に進展した場合も薬剤師だけで問題を解決しようとするケースが多く見受けられる。多職種と連携することで角度の違う視点を研究に取り入れる状況を作り出し、自然な成り立ちでデータを集積し、学会発表や論文作成に至るプロセスを形成していくことが必要である。

一方、臨床現場での問題点の中には、薬学を駆使した研究を行うことでのみ解決し得るものもある。従って、薬剤師は臨床現場での問題が薬学で解決すべきものであるか否かを判断し、現場あるいは基礎のどちらで解決すべきかを見極め、実施していくことが求められる。

本シンポジウムでは、基礎と臨床が融合するモデル研究の実例を提示し、実施する上でのポイントを紹介する。また、薬学研究に求められる基礎と臨床の融合の今後について考える。

（加藤隆児）

抗ウイルス感染症研究のフロンティア

ーウイルス感染症克服に向けた薬学専門分野での挑戦

オーガナイザー

岩谷靖雅（名古屋医療センター）
三隅将吾（熊本大院薬）
玉村啓和（東京医歯大生材研）
藤田美歌子（熊本大院薬）

新型コロナウイルス感染症を通して、RNAワクチンや核酸系治療薬、PCR検査法など、核酸科学を中心とした抗ウイルス感染症研究などが開花した。こうした進展は多岐にわたり、ワクチン・創薬開発だけでなく、検査法や公衆衛生的な予防・予測法の開発にも及んでいる。今後、幅広い専門領域からなる研究力の加勢により、さらに加速すると考えられている。

薬学分野は、合成化学や創薬学、公衆衛生学、薬剤学をはじめとした幅広い専門学で構成され、研究推進に大きな強みがある。しかし、当該分野におけるウイルス感染症学に関する研究が少ないのが現状である。

抗ウイルス感染症研究のフロンティアでは、2014年から当該分野におけるウイルス感染症研究の活性化を目指し、様々なテーマでシンポジウムを企画してきた。今回は、創薬研究だけでなく、生化学や検査学、公衆衛生学をベースに独創的な研究を行っている演者にもご講演いただき、薬学ウイルス研究の進展を紹介したい。

（岩谷靖雅）

理事会企画シンポジウム

デジタルヘルスケアの現状と展望

オーガナイザー

岩渕好治（東北大院薬）
石井伊都子（千葉大病院薬）
佐々木茂貴（長崎国際大薬）

デジタル変革の潮流が、医療の構造と概念に変容をもたらしつつある。スマートフォンやPCは日常に溶け込み、息をするようにSNSを使いこなし、世界の情報をタイムラグなく取り込むことができるデジタルネイティブ世代が社会を支える時代となってきた。創薬や臨床まで、あらゆる場面でデジタル技術が浸透し始めていることを感じている方も多いと思う。

では、何がどこまで進んでいて、今後どのようにっていくのか。新型コロナウイルス感染症のため、学会等でのタイムリーな情報交換が困難となっている中、日本薬学会理事会では、そのビジョンを会員の皆さんとぜひ共有したいと考えた。

本シンポジウムでは、創薬・医療・行政の最先端でデジタル変革を推進する第一人者をお招きして、広域の薬学研究におけるデジタル技術の実態を講演いただき、今後の薬学の展望について皆さんと議論を始める契機としたいと考えている。

（岩渕好治）

シンポジウムの概要

関連記事 3～8、13～17ページ

ポストコロナ時代を見据えた 感染症ワクチン研究

オーガナイザー

吉岡靖雄（阪大先導）
國澤純（医薬健栄研）

世界的なワクチン接種にも関わらず、新型コロナウイルスが未だ猛威を振っており、ポストコロナ時代には程遠い状況にある。一方で、今回の感染症有事を反省に、ポストコロナ時代に向け、様々な感染症ワクチンの開発を加速する必要性が叫ばれている。

例えば、身近な感染症である手足口病（エンテロウイルスなどが原因）、りんご病（パルボウイルスが原因）、細菌性食中毒のみならず、日本でも問題視されている重症熱性血小板減少症候群（SFTSウイルスが原因）や鳥インフルエンザなど、未だワクチンの

存在しない感染症に対するワクチン開発の推進こそが、次なる感染症有事に向けた取り組みとして必須と言えよう。さらに、メッセンジャーRNAワクチンの開発から明確なように、新たなワクチンプラットフォームの開発も最重要課題となっている。

そこで本シンポジウムでは、ポストコロナ時代を見据え、様々な感染症に対するワクチン開発の事例を第一線の先生方にご講演いただき、現状の課題と今後を議論したい。

感染症ワクチンの開発は、様々な薬学研究の知識・技術を総動員して初めて達成し得るものであり、活発な議論により日本発のワクチン開発が加速するものと期待している。

（吉岡靖雄）

微小空間に生体環境を模倣して 新薬開発を加速する

ー日本発MPSの最先端

オーガナイザー

山崎大樹（国立衛研）
石田誠一（崇城大生物生命）

MPS（Microphysiological Systems：生体模倣システム）とは、すなわち、微小空間に各種臓器の生理学的環境を模倣した臓器コンパートメントである。これらを連結することで生体における臓器間相互作用をin vitroで再現することも可能である。

創薬では、新薬開発コストの増加、ヒトー動物の種差によるヒト予測の不確実性等が問題となっており、MPSの発展が解決の一助となることが期待されている。国内では日本医療研究開

発機構（AMED）において2017年度から「再生医療技術を応用した創薬支援基盤技術の開発プロジェクト」が開始され、国内におけるMPSの研究開発が本格化した。

本シンポジウムでは、日本のMPS開発をリードする研究者に最新の研究成果をデバイス開発、腸ー肝循環、血液脳関門（Blood brain barrier：BBB）の観点から発表・解説していただく。さらに、MPSユーザーとして想定される製薬企業からの視点をもとに今後のMPS技術開発の方向性を提案していただく。日本におけるMPSの創薬応用の展望について議論を深めたい。

（山崎大樹）

実習ポイントを捉えた

薬学生病院実務実習ノート

2018改訂版

公益社団法人
神奈川県病院薬剤師会 編

「改訂薬学教育モデル・コアカリキュラム」に準拠し、F 薬学臨床の各項目における病院薬剤師業務に関連する内容をわかりやすくまとめています。

《本書のポイント》

- 実習病院で学んだことを書き込むことができる
- 各章には「学習のポイント」およびそのポイントを習得するために考えられた「実習ポイント」を示し、到達目標を見据えて実習に臨める
- 実習項目として掲載していない臨床現場でしかわからない知識や業界用語の解説などを「ちょっとブレイク・kaffeepause」としてコラム形式で掲載

《目次》

序	章	病院実習を始めるにあたって
第 1 章	調剤	
第 2 章	注射剤調剤（個人別セット）	
第 3 章	医薬品管理	
第 4 章	医薬品情報管理	
第 5 章	薬剤管理指導と病棟薬剤業務	
第 6 章	治療薬物モニタリング（TDM）	
第 7 章	多職種連携	
第 8 章	がん化学療法	
第 9 章	製剤	
第 10 章	治験管理	

充実した病院実習のために
薬学生・指導薬剤師・大学教員に
役立つ一冊です！

A4 判 / 270 頁
定価 3,080 円（本体 2,800 円＋税 10％）
発行：2022 年 2 月



薬事日報社

書籍の詳細・ご注文はURLまたはQRコードからオンラインショップ ⇒ <https://yakuji-shop.jp/>